

コラム

アジア6カ国再生可能エネルギー研修プログラムに携わって

新エネルギー・国際協力支援ユニット

谷尾 恭一

2010年9月から2012年3月の1年半以上にわたって、アジア6カ国の政府関係者に対する再生可能エネルギー導入についての研修プログラムに携わった。研修は対象国である6カ国(マレーシア、モンゴル、ミャンマー、ネパール、フィリピン、ベトナム)から各5名ずつ計30名を招請し、タイ国の中北部ピッサヌロークにあるナレスアン大学内の再生可能エネルギー研究所にて行われた。主たる講師は日本から派遣すると同時に、一部講義は同研究所の教授等に委託し、計5回の研修を実施した。仕上げの研修は昨年11月に日本で行われたが、各講師の先生方の熱心かつ綿密なご指導の下に講義用教科書のブラッシュアップに努めた。また、あわせて公開セッションとしてカンントリーレポートの発表を各国が実施した。更に、最後は各出身国でマスタートレーナーとして自国の受講生に講義を行った。

(研修目的と内容)

研修の目的は、再生可能エネルギー全般の開発と普及に関する政策と技術に関する人材育成であり、受講した研修生がマスタートレーナーとして、自国の人々に教育を施すことが出来るまでに養成することである。研修対象範囲は広く、太陽光発電、太陽熱発電、風力発電、水力発電、バイオマス発電、ディーゼル発電(バックアップ用)他とミニグリッド発電、大規模系統連系、標準・検定・認証、再生可能エネルギー政策、地球環境とCDM関連、経済性評価手法、実際のソフトを使用した演習、等と広範囲にわたった。また、通常の講義に加えて大学内の実証試験施設による研修や視察ツアーなど多岐にわたったメニューとなった。

研修はほぼ2か月に一回の開催のペースで、参加する方の研修生も日常業務で多忙の中、2週間、職務を離れなくてはならない。一方、我々事務局側も、講師・講義の手配、ロジ手配等を時間的制約の中でこなさなければならず、一回の研修が終われば研修報告書作成と同時に次の研修の組み立てと準備に多忙を極めた。研修に当たって生じた大きな問題は、国ごとの再生可能エネルギー導入レベルにばらつきが大きく、また、研修生が持つ知識や英語力にもばらつきが大きいことだった。講義のレベルをどこに置くかという点で非常に難しい問題を提起した。簡単ではないが、研修生選択の段階でレベルをある程度絞り込む作業も必要だと感じた。

本事業の総決算である自国研修は、6カ国それぞれにて1-3月に、かなり密度濃く実施され、その全てを訪問しそれぞれの国情と再生可能エネルギーの普及・進展状況をつぶさに見

ることが出来たのは、この上もなく有益な体験であった。

最初のマレーシアは、もともとレベルも高いこともあり、そつなく順当にこなした感があり、ゼロ・エミッション・ビル、BIPV(建物一体型太陽光パネル)の視察ツアーも充実していた。またアジアにおける先進的な国としてマレーシアが中心となり研修事業を立ち上げてはという同国政府役人の意向もあり、今後の展開が注目される。

次にフィリピンは、聴衆がすべてエネルギー省の人たちで統一されていたこともあり、整然と行われた感がある。今後は太陽光、水力等既存のインフラをベースに、高い潜在力を持つ地熱発電の特徴を生かした開発が期待される。以上の2カ国は英語で講義がなされたため、その面では通訳手配の必要もなく、我々事務局にとっても都合が良かった。

ベトナムは、自国語で講義を行い英語への通訳を付けた形だが、日本で実施した英語での講義は心もとない感じであったが、自国語になると流暢にこなし、聴衆を満足させる出来栄であったことは事務局にとって望外の喜びであった。

ミャンマーについては、英語のレベルが研修初期から中盤にかけて急にアップしてきた感があり、丁度国内体制の急激な変化の時期と符合しているのは偶然ではなかろう。同国には日本の企業も「アジアのラストリゾート」としてにわかに関心を始め、進出企業も急激に増加している現状だが、水力に加え、今後、太陽光・風力・バイオマスおよびそれらとディーゼル発電とのハイブリッド発電の潜在性が相当期待できよう。

ネパールは、首都カトマンズではなく西部の保養地ポカラで中央および地方の自治体組織を集めて実施された。講義は自国語で行われ、Q&Aのみ通訳を入れる形で実施された。施設見学は、太陽光、バイオマスが対象のローカル色豊かなものであり、ポカラのホテルに設置されたバイオガス生産プラント、農村の牛糞からのバイオガス生産、また農家の屋根に設置された照明用の小規模なPVパネルと蓄電池のセットを視察できた。今後は、主力の水力発電のみならず多様な展開が期待できる。

最終国のモンゴルは、雪がある程度溶け気温がマイナス10℃程度まで上昇する3月上旬を選んでの研修となり、講義はモンゴル語で同時通訳を入れての実施となったが、1人が留学で欠席の中、4人で5人分のレクチャーをカバーし、講義レベルも相当高い水準となっていた。施設見学は、郊外の雪原に設置されている太陽光と風力のハイブリッド発電装置で、系統に連系している。この実証発電所は韓国とモンゴルとの共同で実施された事業で、後にモンゴルに移管され、モンゴル人が保守管理を行っている。地理的な優位点からも歴史的なつながりからも、ロシア、中国、韓国の積極的な食い込みが印象的である。日本が支援した実証プラントも首都から900km南のノンソームにあるが、日本の官民による更なる支援と事業参加が期待される。

1年半にわたる本事業は、3月末で終了となったが、各国とも研修終了が即、関係の終了ではなく、今後も日本側に引き続き要望を出すので、更なる保守管理を含めた事業を立ち上げ支援を継続してほしいとの期待が異口同音に寄せられた。

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp